

Be hungry and be foolish!

村越 真

約35年前の競技オリエンティアの数は今とそう変わらなかったが、競技力を高めようとする様々な人の活動から刺激を受けた。多摩OLは、毎年1冊以上のペースで「オリエンテリング研究」という研究誌を出していた。英語文献の和訳や、クラブ内での研究成果が掲載されていた。それは自分のオリエンテリングに直接役立つと同時に、そのような実践研究的アプローチがあることを知ったことは、その後の自分の人生に大きな影響を与えた。

日常的に競技力を高める努力をしているクラブは多摩に限らなかった。ナショナルチームがスコードと呼ばれていたころ、何度も関西のクラブに呼ばれた。僕らが最新の考えに基づき企画した合宿を彼らは楽しみ、またそれが選手強化や世界選手権遠征の資金の足しにもなった。何よりも、そういう依頼を受けることが、日本のトップとしての自覚につながった。先日亡くなったスティーブン・ジョブスの言葉を借りれば、多くのオリエンティアがhungryであると同時にfoolishであった。

◇◇◇

最近、hungry さやfoolish さがなくなったように感じられる。自分を少しでも高いところに導こうと努力や工夫をばかになって続ける人は、一般のオリエンティアから強化選手に至るまで、ごく一部にしか感じられなくなった。こんな文化環境の中では、どんなに大会を魅力的にしても活気は生まれない。うまくなれば、それを試してみたいと思う。当時の大会は現在に比べれば運営レベルは決して高くなかったが、それでも活気があり、人を集めたのは、イベントを走ることに對する愛好者の思い入れが、今より強かったからではないだろうか。

一般のオリエンティアがhungryでfoolishであることは、トップ選手にとっても重大な意味を持つ。トップ選手たるもの自分の努力で強くならなければならない。しかし、強く／うまくなることに対してハングリーでばかになれる文化があれば、その中で育った彼らにとって挑戦はごく当たり前のものになり、結果としてより高いところに

いけるはずだ。

hungry さもfoolish さも個人の特性だが、それを支援する環境を作ことはできる。たとえばスキーならバッジシステムで、より上級の技術とはどんなものであるかを知り、それを客観的に評価するシステムが存在する。公の評価がなくても、多くのスポーツでは技術体系や大会の階層構造として、自分がこれから登ろうとしている階梯は明確であり、またそのための練習法も確立している。だからこそ、一般の愛好者でもばかになり得る。陸上競技でも、タイムや年代別タイムという点で、目指すべきパフォーマンスが明確であり、それが努力や工夫へのモチベーションになる。

◇◇◇

本年度、J O Aではこうした競技環境を整えるために、二つの主要な事業を試行的に始めた。一つは技術体系とそのための指導・練習法のアーカイブ化である。この40年間に初心者から上級者に至る技術が明確化され、導入法や練習法も優れたものが開発された。それらをまとめ、公開することで普及の一助とすると同時に、オリエンテリング愛好者には、目指すべき目標と

そこへのステップを明確にすることで、よりhungryかつfoolishになる素地が提供される。もう一つの試みは、大会会場でのトップ選手によるクリニックである。上級者が初級・中級者に指導する場面は、他のスポーツに比べるなら、頻度が少ないと言わざるを得ない。J O Aの公的助成によってトップ選手が一般のオリエンティアにそのスキル的一端や練習法を伝える場を作れば、多くのオリエンティアが強くなることを身近なものとして捉えるだけでなく、トップ選手自身の刺激にもなるはずだ。

教え子の学校でミニオリエンテリングの実践をさせてもらった。その時、彼女が「村越先生は、野球でいうとイチローみたいな存在なんだよ」というと、子どもたちは僕に無邪気にサインを求めてくる。社会的に認められた地位に就いた42歳の時でさえ、それ以上の喜びを感じることは希である。ナショナルチームの選手は同じような賞賛に値するだけのものをもっているはずだ。

枠組みは作られつつある。それを生かし発展させることは、オリエンティアの肩にかかっている。

(村越 真)



自分が培った技術が社会に生きる。そんな達成感や充実感は、スポーツの広がりには欠かせない。日本体育協会でも、これまでの「する」「みる」から、「育てる」楽しみを掲げている。